

## 古代から近世までの製筆技術

久保井宏和

毛筆が中国大陸において初めて造られ、それが日本に伝わってきたということは事実であろう。しかしいつ日本に伝わり、いつからその製造が始まるのかということは、今日においても未だに確固とした定説がない。

わが国での筆の製造が、弘法大師より始まるというのは今日でも行われている一つの説である。しかしこれが誤りであることは早くに指摘されていることである。

安彦勘吾氏は『奈良の筆と墨』のなかで次のように述べている。漢字がわが国に伝来したのは『記紀』によると、応神天皇のときというから、五世紀のはじめとなる。ところが、わが国と中国との交渉は、このときよりも早いとされている。渡来人にともなって、筆は日本に入ってきたと想定される。

漢字が伝来したのは、周知のように応神天皇の十五年である。漢字の伝来とともに筆記具としての筆が、中国ないし朝鮮半島から伝わったとみることは可能であろう。

今日において、なお巻筆の技術を伝えている藤野家に、京都の筆匠梅宗園の増井惣輔が記した『梅宗園手録』の写本が残っている。この『梅宗園手録』に、「人王十六代應神天皇十六年己二月始テ筆製」という記述がある。

応神天皇は『記紀』をもとにすれば十五代目でありこの記述の信頼性がどこまでのものであるかという問題はあるものの、漢字が伝来し

たところに筆が伝わったとする安彦氏の説を裏付けるものとして考えてもよいのではなからうか。

『正倉院棚別目録』によれば、正倉院に十九本の筆が伝えられている。わが国に現存する最古の筆である。これらは「みな短い毫(毛)を紙で巻き込んで、円錐形にまとめた雀頭筆と呼ばれるものである。ここから奈良時代の筆が巻筆であったことがうかがえる。ただこの巻筆は、雀頭筆と呼ばれていることからわかるように穂首の部分が極めて短いものである。

次に、平安時代になって弘法大師が嵯峨天皇に献上した上表文を次に見てみたい。

### 筆を奉献する表

狸毛の筆四管、真書一、行書一、草書一、写書一、右、伏して昨日の進上を奉って、且つ筆生坂名井清川をして造り得て奉進せしむ。

空海、海西に於て聴き見し所、此の如し。其の中に大小、長短、強柔、齊尖なる者は、字勢の危細に随つて惣て取捨するのみ。毛を簡ぶの法、紙を纏ふの要、墨を染めて藏め用ふること、並びに皆伝へ授け訖んぬ。空海自家にして試みに新作の者を見るに、唐家に減らず但恐らくは星の好み各別にして聖愛に允はざることを。自外八分小書の様、脚書臨書の式、未だ作ることを見ずと雖も、口授を具足することを得たり。謹んで清川に附して奉進す。不宣。謹んで進る。

弘仁三年六月七日

沙門 空海 進る

巻筆というのは芯毛の腰を強靱な紙で巻き締め、衣毛を着せてそれを何度か繰り返すという方法で穂首の部分を作るのであるが、ここに

「紙を纏ふの要」とあるので、弘法大師の製筆法はあきらかに巻筆の方法である。弘法大師が坂井名清川に造らせた筆は、巻筆であった。この筆が具体的にどのようなものであったかは今のところわからない。ただその様子を窺わせるものが、藤野家に伝わる大師流製筆と呼ばれる筆である。

この大師流製筆は天平筆と比べて穂首の部分が長い。先に引用した上表文にも「大小、長短」とあるが、平安時代になると、天平筆に比べると長鋒の筆が造られるようになったと考えてよいだろう。

材料には主に、鹿の毛を用いたと考えられる。『滋賀県指定無形文化財調査報告第三冊 毛筆』には次のように記してある。

巻筆は天平時代から藤原、鎌倉時代は勿論、江戸時代まで使われ、江戸時代御家流の人たちは、よくこの筆を用いたものである。

材料には、鹿の真毛（しんげ）とか真走りなどといった毛に鹿の尻の白いところの毛である白真（しらじん）などを多く使った。

このように巻筆を造る技術、すなわち巻き立て法による製筆法が江戸時代になるまで広く行われていたが、江戸の元禄期になって学人の細井広沢によって無芯筆の製造方法、すなわち練りませ法による製筆法が広められることとなった。広沢自身の著である『思貽齋管城二譜』の序には「今六七寸ノ毛ヲ以ツテシテ柱ハ三分ノ一二ニ居ル、則チ其ノ運用紀伏ハ僅ニ二寸ナリ（中略）唐山ノ製ハ能ク墨藩ヲ含ミテ運動自在、起止無礙、大抵ハ六七寸ノ毫ヲ用ヒテ三四尺ノ字ヲ書ク可キニ勝フ。」と記してある。練りませ法は、「細井広沢が中国の製筆法を研究して、完成したものであると考えられている。

広沢が練りませ法を広めようとした理由は、従来の巻筆では当時の

中国で書かれていたような雄渾な文字は書くことができないうものであったと考えられている。

しかし無芯筆がこれで広く流布するようになったと考えるわけにはいかない。

塚原蓼州の『江戸沿革私記』には「寺小屋に流派多し、謂ゆる溝口流、御家流、大橋流、持明院流、花形流、此うち溝口を以て其首なるものとす、用筆は初に太筆次に椎の実、次に半真、夫より勝盛と云を用ふ、水筆の如きは唐様筆と卑みて其使用を禁すること仏徒の耶蘇の十字架を見る如し」と記してある。

広沢が江戸で広めた無芯筆（水筆）は寺小屋では使用することが禁止されていたということがここからうかがえるのである。

製筆技術としては練りませ法が江戸時代に確立されたと考えてよいであろう。しかし之が巻き立て法を凌ぐだけのものにはなりえていなかったのではなからうか。江戸までは依然として巻き立て法が主で、練りませ法が主となるのは明治になってからと考えられるのである。

江戸時代に巻き立て法が主であったのなら、熊野（芸州筆）や川尻に伝わった製筆技術も最初は巻き立て法であつたらうという事が推測できる。